

昭和文学全集



12

坂口安吾

舟橋聖一

高見順

円地文子

昭和文学全集

第12巻

昭和六二年一〇月一日 初版第一刷発行

著者 坂口安吾 舟橋聖一 高見順 円地文子

発行者 相賀徹夫

発行所 小学館

一〇三 東京都千代田区一ツ橋 丁目三番一 号

振替 東京八十一〇〇番

電話 編集・〇三二一三〇一九一四三五一

業務・〇三二一三〇〇五三三三

販売・〇三二一三〇〇五七三九

印刷 凸版印刷株式会社

製本 凸版印刷株式会社

若林製本工場

用紙 三菱製紙株式会社

著者検印は省略いたしました

定価=4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568012-1

©MICHIO SAKAGUCHI MIKAKO FUNAHASHI

AKIKO TAKAMA MOTOKO FUKE 1987

*造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。*本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社まで許諾を求めてください。

目次

坂口安吾 5

7 ふるさとに寄する讃歌

12 風博士

16 黒谷村

33 逃げたい心

46 真珠

54 二流の人

96 白痴

111 外套と青空

122 風と光と二十の私と

133 道鏡

149 桜の森の満開の下

161 青鬼の禪を洗う女

188 夜長姫と耳男

208 FARCE に就て

215 枯淡の風格を排す

220 文学のふるさと

224 日本文化私観

239 墮落論

245 続墮落論

251 デカダン文学論

258 二合五勺に関する愛国的考察

264 教祖の文学——小林秀雄論

舟橋聖一 273

275 悉皆屋康吉

372 華燭

380 ある女の遠景

高見順 529

531 故旧忘れ得べき

627 如何なる星の下に

714 描写のうしろに寝ていられない

717 文学非力説

722 死の淵より

740 高見順日記 昭和20年8月15日～8月20日

円地文子 763

765 女坂

848 女面

917 なまみこ物語

989 妖

1001 二世の縁拾遺

1011 花喰い姥

1017 作家アルバム

解説

1025 坂口安吾……秋山駿

1032 舟橋聖一……野口富士男

1039 高見順……栗坪良樹

1046 円地文子……竹盛天雄

年譜

1053 坂口安吾……久保田芳太郎

1058 舟橋聖一……藤井淑偵

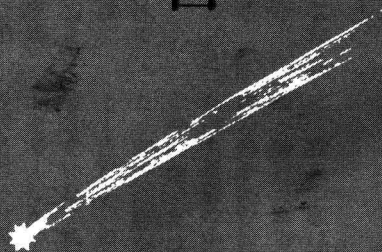
1064 高見順……川島かほる・倉和男

1069 円地文子……和田知子

1076 底本について

1077 用字用語について

坂口安吾



ふるさとに寄する讃歌

夢の総量は空気であつた

私は蒼空を見た。蒼空は私に沁み込んだ。私は瑠璃色の波に噎ぐ。私は蒼空の中を泳いだ。そして私は、もはや透明な波でしかなかった。私は磯の音を脊髄にきいた。単調なりズムは、其処から、鈍い蠕動を空へ撒いた。

私は寢れていた。夏の太陽は狂暴な奔流で鋭く私を刺し貫いた。その度に私の身体は、だらしなく砂の中へ舞い落ちる霧のようであつた。私は、私の持つ抵抗力を、もはや意識することがなかった。そして私は、強烈な熱である光の奔流を、私の胎内に、それが私の肉であるように感じていた。

白い灯台があつた。三角のシャッポを被つていた。ピカピカの海へ白日の夢を流していた。古い思い出の匂がした。佐渡通いの船が一塊の煙を空へ落した。海岸には高い砂丘がつづいていて。冬にシベリヤの風を防ぐため

に、砂丘の腹は茱萸敷だつた。日盛り、蠡蜋が酔いどれでいた。頂上から町の方へは、蟬の鳴き沁む松林が頭をゆすぶつて流れた。私は茱萸敷の中に佇んでいた。

その頃、私は、恰度砂丘の望楼に似ていた。四方に展かれた望楼の窓から、風景が——色彩が、匂が、音が、流れてきた。私は疲れていた。私の中に私がなかった。私はものを考えなかった。風景が窓を流れすぎるとき、それらの風景が私自身であつた。望楼の窓から、私は私を運んだ。私の中に季節が育つた。私は一切を風景に換算していた。そして、私が私自身を考えた時、私も亦、窓を流れた一つの風景にすぎなかった。古く遠い匂がした。しきりに母を呼ぶ声がした。

私は、求めることに、疲れていた。私は長い間ものを求めた。そのように、私の疲れも

古かつた。私の疲れは、生きることにも堪え難いほど、私の身体を損ねていた。私は、ときどき、私の身体がもはや何処にも見当らぬように感じていた。そして、取り残された私のために、淡い困惑を浮べた。私の疲れは——たとえば、茱萸の枝に、私は一匹の昆虫を眺めているのであつた。昆虫は透明な羽をかほそく震わせていた。私は私の身体が、また透明な波であることに気付いていた。それは靄よりも軽い明暗でしかなかった。昆虫の羽の影が、私の身体にあわく映つてゆれた。赤熱した空氣に、草のいきれが濺んでいた。昆虫は飛び去つた。そしてその煽りが鋭く私の心臓を搏撃したように感じられた。太陽のなかへ落下する愉快な眩暈に、私は酔うことを好んだ。

長い間、私はいろいろのものを求めた。何一つ手に握ることができなかった。そして何物も握まぬうちに、もはや求めるものがなくなつていた。私は悲しかった。しかし、悲しさを握むためにも、また私は失敗した。悲しみにも、また実感が乏しかった。私は漠然と、拡がりゆく空しさのみを感じつづけた。涯もない空しさの中に、赤い太陽が登り、それが落ちて、夜を運んだ。そういう日が、毎日つづいた。

何か求めるものはないか？

私は探した。いたずらに、熱狂する自分の体臭を感じるばかりだった。私は思い出を掘り返した。そして或日、思い出の一番奥にたたみこまれた、埃まみれな一つの面影を探り当てた。それは一人の少女だった。それは私の故郷に住んでいた。辛うじて、一、二度、言葉 exchanged した記憶があった。私が故郷を去って以来——十年近く、会うことがなかった。今は生死も分らなかった。而し、掘り出した埃まみれな面影は、不思議に生き生きと息づいていた。日数えて、私は、その面影の生気と、私自身の生気とに区別がつかなくなっていた。私は追われるように旅に出た。煤煙に、頬がくろずんでいた。

私はふるさとに帰りついた。
ふるさとに、私の生家はもう無かった。私は、煤けほうけた旅籠屋の西日にくすんだ四畳半へ、四五冊の古雑誌と催眠業の風呂敷包みを投げ落した。

雪国の陰鬱な軒に、あまり明るい空が、無気力や、辛抱強さや、ものうさを、強調した。鉛色の雪空が、街のどの片隅にも潜んでいた。街に浮薄な色情が流れた。三面記事が木綿の盛装をこらして……。私はすでに、エトランジェであつた。気候にも、風俗にも、人間にも、そして感情にも。私は、暑気の中

に懷手して、めあてなく街を歩いた。額に、窓の開く音が、かすかに、そして爽やかに、絶え間なくこえていた。その音は、街路樹の睡った、しずかに展げる一つの路を私に暗示した。それは如何なる寂しさにも、私に路を歩ませる力を与えた。私は疑い深い目で、行き交う全ての女を見た。行き過ぎてのち、あれがその人ではないのかと、半ば感情を皮肉るように、私は常に思い込もうとした。私は腹の中で笑った。私は、かたくなに振り向くことを怖れた。全ては偶然であれ。私の悲しみも、私の恋人も（いわば笑うべきインテロゲションマークである恋人も）、偶然と共に行き過ぎよ。あれがその人ではなかったかと思う追悔によって、おまえの悲しみは玉となる日があるであろう、と。

彼女とは？ ……いったい、彼女とは誰であらうか？ つきつめて思う時、彼女の面影は、いつもその正確な輪廓を誤魔化し、私の目から消え失せるのであつた。消えてゆく形を追うて、私はいそいで目をつぶるのであつた。もはや、暗闇だけがそこにあつた。私はそこに、一つの面影を生み出そうとした。黒色の幕に、私は白色の円形をおいた。私はそれに、目を加え、鼻を加え、口を加えようとした。私は、私のミューズが造型の暗示を与えるまで、しずかにその円を視守ろうと努め

るのであつた。白色の円は意地悪く伸縮した。そして私が一点を加えようとする度に、陰険に、他の一点を消し去ろうとした。私はそれを妨げるために、私の点描に速力を加えるのであつた。私の癪癪にそうて、円も亦旗のように劇しく揺れた。あきらめて、私は目を開けるのであつた。さわやかに目に沁むものは、家や木や道や、すべて太陽に呑まれた現実の夏であつた。私はそれらを、奇蹟のように驚異して、しばらく呆然と視るのであつた。頬に這う汗を、私は知らず拭いていた。

彼女はいわば、私の中に、このように実感の稀薄な存在であつた。私は、少女の彼女を記憶の中に知っていた。それは疑いもなく真実であつた。しかし彼女は、私の知らぬ間に、私の中に生長していた。そして、私の中に生長した彼女は、もはや現実で成育している彼女とは別の人であるのかも知れなかった。私の中の彼女は、いわば一つの概念であり、一つの象徴であるのかも知れなかった。しかし、その概念を追うて、北国の港町へ太陽を泳いできた私は、概念でもなければ、象徴でもなかった。それは現実の私だった。現に今、ものうい路に埃を浴びて歩いていた。疲れてはいるが、生命と、青春を持っていた。それ故彼女も生きていた。彼女は力であ

った。一目見ることのほかに、そして彼女を追うことの外に、私に何の計算もなかった。

かような私を眺めやるとき、私は私が、夢のように遠い、茫漠とした風景であるのに気付いていた。私は、ふるさとに点々と私の足跡を落しながら、この現実の瞬間が、思い出されている夢であるような遠さに、いつも感じづけていた。私は、その夢を、その風景を、あかずいとおしんだ。風景である私は、風景である彼女を、私の心にならべることをむしろ好むのかも知れなかった。そして風景である私は、空気のように街を流れた。街を燕が、そして私を、横切っていた。

街の埃と、街の騒音が、深く私に沁みっていた。ただ孤り、しずかな杜に潜む時でも、皮膚に沁みた街の騒音が、私の身体をとりかこんでいた。砂山で、高くはれた夜の下にも、皮膚にうごめく雑沓の足音をきいた。それは夜空へ散っていった。そして、発散する騒音と入れ換りに夜の静寂が、又ある時は磯の音が、ささざえと私に沁みた。何物か、私の中に澄み切ろうとする気配がしていた。夜空が、すべて宇宙が、甘い安心を私に与えた。

或る夜は又、この町に一つの、天主教寺院へ、雑沓の垢を棄てにいった。僧院の間に私の幼年のワルツがきこえた。影の中に影が、疑惑の波が、半ばねぶたげな夢を落し

た。ポプラーの強い香が目にしみた。さわがしく蛙声がわいた。神父はドイツの人だった。黒い法衣と、髭のあるその顔を、私は覚えていた。そのために、羅馬風十字架の姿を映す寂びれた池を、町の人々は異人池と呼んでいた。池は、砂丘と、ポプラーの杜に囲まれていた。十歳の私は、そこで遊んでいた。ポプラーの杜に、あたまたから秋がふけた、時雨が、けたたましく落葉をたたいて、走りすぎた。赤い夕陽が、雲の断れ間からのぞいた。私はマントを被っていた。寺院の鐘が鳴った。釣竿をすてて、一散に家へ、私は駆け

た。降誕祭に、私は菓子をもらった。ポプラーの杜を越えて、しもたやの灯りが見えた。窓が開け放してあった。裸の男女が食事していた。たくましい筋肉が陰を画いた。昔はそこに、私の友人が住まっていた。私より四五歳年上であった。町の中学で一番の暴れ者だった。柔道が強かった。私は一年生だった。私は毎日教室の窓をぬけ出して、海岸の松林を歩いた。彼は優しい心を持っていた。彼によく似た私を、彼の墮ちた放埒から遠ざけるために、はげしく私を叱責した。人々は、私を彼の少年だと誤解した。私は町の中学を放校された。彼は猟に出て、友人の流れ弾にあたって、死んだ。

僧院の窓はくらく、祈禱の音も洩れなかつ

た。何事か、声高く叫びたい心を、私は切に殺していた。騒がしい食膳の音が流れていた。

姉が病んで、この町の病院へ来ていることを知った。黒色肉腫を病んでいた。年内に死ぬことを、自分でも知っていた。毎日ラジウムをあてていた。私の父も肉腫で死んだ。その遺伝を私は別に怖れなかった。

姉は聡明な人だった。子供のために、よき母であった。そのために、姉は年老いて、少女の叡智を失わなかった。姉は私を信じていた。それ故、私は、姉に会うことを欲しなかった。全て親密さは、風景である私にふさわしくなかった。それは、苦い刺戟を私に残した。私は襦袢であった。人の親密さを、受けとめるに足る弾力は、私の中に已になかった。同じ土地に、姉の病むをききながら、見舞に行くことを、毎日見合わせた。彷徨の行きずりに、ときどき、薬品の香が鼻にまつわった。私は目を閉じて、知らぬ顔をした。私はアイスクリームを食べた。匙を、ながく、しゃぶっていた。

太陽の黒点を、町の新聞が論じていた。訪れはせぬつもりで、病院の前へ私は来ていた。私は往復した。看護婦が私を見ていた。私は病院へ這入った。姉は出迎えに走り

出た。常人と殆んど変りは見えなかった。ただ、死ぬことを心に決めた、実に淋しい白さがあつた。田舎から見舞に來た子供達が、丁度帰ったあとだった。たべちらした物の跡が、部屋一面に散乱していた。楽しい子供達を乗せた汽車が、私の目に勇ましく鉄橋を渡った。子供を楽しく暮らせるために、如何なる仮面をも創り出す人だった、私の姉は。姉は子供について語った。長女に結婚の話が持ち上っていた。その心配で、姉は病を忘れがちだった。私は煙草を何本もふかした。姉は私にマツチを擦った。姉は私の吸いがらを掌にのせて、長くそれをもてあそんでいた。夢に植物を見ると姉は語った。

「お前のために素敵な晩餐会を開きたい……」

その言葉を、姉は時々くり返した。私は、ルイ十四世が、かつて開いた宴会の献立を、姉に語った。姉は山毛櫨の杜で食事をしたことがあつたと語った。虚勢を張って、二人はいつまでも、空々しい夢物語をつづけた。毎日病院を訪れることを約束した。子供達の見えない日には、私が病院に泊まることを約束した。

雪国の真夏は、一種特別の酷暑を運んだ。ひねもす無風状態がつづいた。そのまま陽が落ちて、夜も暑気が衰えなかった。姉はしき

りに水を摂った。窓の外に、重苦しく垂れている無花果の葉があつた。それに月が落ちていた。姉はそれに水を撒いた。

数日の中には、流石に一人知り人に出会った。二三の立ち話を交えて、笑うこともなく、別れた。又一人会った。彼は年老いた車夫だった。私に、車に乗ることを、しきりにすすめた。私をのせて、車は日盛りに石のある道を廻転した。年と共に隆盛である幸福を、歌うように彼は告げた。私は、よろこばしげに笑った。幌がふるえた。ピヤホールに一人の女給が、表戸を拭いていた。車夫の家で、私達は水瓜を食べた。

彼女の家に、別の家族が住んでいた。幼かつた少女が、背をもたせて電線を見ていた門は、松の葉陰に堅く扉を閉じていた。三角の陽が影を切った。

私は耳を澄ました。私は忍びやかに通りすぎた。私は窓を仰いだ。長くして、私はただ笑った。私は海へ行った。人氣ない銀色の砂浜から、私は海中へ躍り込んだ。爽快に沖へ出た。掌は白く輝いて散乱した。海の深さがしきもつていた。突然私は死を思い出していた。私は怖れた。私の身体は、心よりも尚はやく狼狽しはじめていた。私の手に水が当ら

なくなっていた。手足は感覚を失った。私の吐く潮が、鋭い音をたてた。私は自分が今吹き出している欲望にかられていることを、滑稽な程悲痛に、意識した。私は陸へ這い上った。私は浜にねた。私は深い睡りにおちた。

その夜、病院へ泊った。私は姉に会うことを、さらに甚しく欲しなかった。なぜなら、実感のない会話を交えねばならなかったから。そして私は省るに、語るべき真実の一片すら持たぬようであつた。心に浮ぶものは、すべて強調と強制のつくりものにみえた。私は偶然思い出していた。彼女に再び逢う機会はあるまい、と。それは、意味もなく、あまり唐突なほど、そして私が決して私自身に思い込ませることが出来ないほど、やるせない悲しみに私を襲うのであつた。私は、かような遊戲に、この上もなく退屈していた。しばらくして、もはや無心に雲を見ていた。

姉も亦、姉自身の嘘を苦にやんでいた。姉は見舞客の嘘に悩んで、彼等の先手を打つように姉自身嘘ばかりむしろ騒がしく吐きちらした。それは白い蚊帳だった。電灯を消して、二人は夜半すぎるまで、出まかせに身の不幸を歎き合った。一人が真実に触れようとするとき、一人はあわただしく話題を変えた。同情し合うフリをした。嘘の感情に洩ながした。くたびれて、睡った。

朝、姉の起きぬうちに、床をぬけて海へ行った。

港に六千噸の貨物船がはいった。耳寄りなニュースに、港の隆盛を町の人々が噂した。私は裏町に、油くさい庖厨の香を嗅いだ。また裏町に、開け放された格子窓から、脂粉の匂に噎んでいた。湯垢の香に私はしみた。そして太陽を仰いだ。しきりに帰心の陰が揺れた。

東京の空がみえた。置き忘れてきた私の影が、東京の雑沓に揉まれ、蹂みしだかれ、粉碎されて喘いでいた。限らないその傷に、無言の影がふくれ顔をした。私は其処へ戻ろうと思った。無言の影に言葉を与え、無数の傷に血を与えようと思った。虚偽の泪を流す暇はもう私には与えられない。全てが切実に切迫していた。私は生き生きと悲しもう。私は塋墳へ帰らなければならない。と。

私達はホテルの楼上に訣別の食卓をかこんだ。街の灯が次第にふえた。私は劇しくイライラしていた。姉は私の氣勢に吞まれて沈黙した。私達は停車場へ行った。私達は退屈していた。汽車がうごいた。私は興奮した。夢中に帽子を振った。

別れのみ、にがかった。

風博士

諸君は、東京市某町某番地なる風博士の邸宅を御存じであろう乎？ 御存じない。それは大変残念である。そして諸君は偉大なる風博士を御存知であろうか？ 御存じない。それは大変残念である。では偉大なる風博士が自殺したことも御存じないであろうか？ ない。嗚乎。では諸君は遺書だけが発見されて、偉大なる風博士自体は査として紛失したことも御存じないであろうか？ ない。嗟乎。では諸君は僕が其筋の嫌疑のために並々ならぬ困難を感じていることも御存じないのであるか？ 於戲。では諸君は僕が偉大なる風博士の愛弟子であったことも御存じあるまい。しかし警察は知っていたのである。そして其筋の計算に由れば、偉大なる風博士は僕と共謀のうゑ遺書を捏造して自殺を装い、かくてかの憎むべき蝸博士の名譽毀損をたく

らんだに相違あるまいと睨んだのである。諸君、これは明らかに誤解である。何となれば偉大なる風博士は自殺したからである。果して自殺した乎？ 然り、偉大なる風博士は紛失したのである。諸君は輕率に眞理を疑つていいのであろうか？ なぜならば、それは諸君の生涯に様々な不運を齎らすに相違ないからである。眞理は信ぜらるべき性質のものであるから、諸君は偉大なる風博士の死を信じなければならぬ。そして諸君は、かの憎むべき蝸博士の——あ、諸君はかの憎むべき蝸博士を御存知であろうか？ 御存じない。噫呼、それは大変残念である。では諸君は、まづ悲痛なる風博士の遺書を一読しなければならぬまい。

風博士の遺書

諸君、彼は禿頭である。然り、彼は禿頭である。禿頭以外の何物でも、断じてこれある筈はない。彼は髪を以て之の隠蔽をなしおるのである。ああこれ実に何たる滑稽！ 然り何たる滑稽である。ああ何たる滑稽である。かりに諸君、一撃を加えて彼の毛髪を強奪せりと想像し給え。突如諸君は氣絶せんとするのである。而して諸君は氣絶以外の何物にも遭遇することは不可能である。即ち諸君は、猥褻名状すべからざる無毛赤色の突起体に深く心魄を打たるであらう。異様な臭氣は諸氏の余生に消えざる歎きを与えるに相違ない。忌憚なく言えば、彼こそ憎むべき蝸である。人間の仮面を被り、内にあらゆる悪計を蔵すところの蝸は即ち彼に外ならぬのである。

諸君、余を指して誣告の誹を止め給え、何となれば、眞理に誓つて彼は禿頭である。尚疑わんとせば諸君よ、巴里府モンマルトル三番地、Big Benquette ショオブ氏に訊き給え。今を距ること四十八年前のことなり、二人の日本人留学生によって鬘の購われたることを記憶せざるや。一人は禿頭にして肥満する豚児の如く愚昧の相を漂わし、その友人は

黒髪明眸の美少年なりき、と。黒髪明眸なる友人こそ即ち余である。見給え諸君、ここに至つて彼は果然四十八年以前より禿げていたのである。於戲実に慨嘆の至に堪えんではない乎！ 高尚なること櫛の木の如き諸君よ、諸君は何故彼如き陋劣漢を地上より埋没せしめんと願わざる乎。彼は鬢を以てその禿頭を瞞著せんとするのである。

諸君、彼は余の憎むべき論敵である。単なる論敵であるか？ 否々々。千辺否。余の生活の全てに於て彼は又余の憎むべき仇敵である、実に憎むべきであるか？ 然り実に憎むべきである！ 諸君、彼の教養たるや浅薄至極であります。かりに諸君、聡明なること世界地図の如き諸君よ、諸君は学識深遠なる蛸の存在を認容することが出来るであろうか？ 否々々、万辺否。余はここに敢て彼の無学を公開せんとするものである。

諸君は南欧の小部落バスクを認識せらるるであろうか？ もしも諸君が仏蘭西、西班牙両国の国境をなすピレネエ山脈をさまようならば、諸君は山中に散在する小部落バスクに逢着するのである。この珍奇なる部落は、人種、風俗、言語に於て西欧の全人種に隔絶し、実に地球の半廻転を試みてのち、極東じやばん国にいたつて初めて著しき類似を見出すのである。これ余の研究完成することなく

しては、地球の怪談として深く諸氏の心胆を寒からしめたに相違ない。而して諸君安んぜよ、余の研究は完成し、世界平和に偉大なる貢献を与えたのである。見給え、源義経は成吉思汗となつたのである。成吉思汗は歐洲を侵略し、西班牙に至つてその消息を失うたのである。然り、義経及びその一党はピレネエ山中最も氣候の温順なる所に老後の隠栖をトしたのである。之即ちバスク開闢の歴史である。しかるに嗚乎、かの無礼なる蛸博士は不遜千万にも余の偉大なる業績に異論を説いたのである。彼は曰く、蒙古の歐洲侵略は成吉思汗の後継者太宗の事蹟にかかり、成吉思汗の死後十年の後に當る、と。実に何たる愚論淺識であろうか。失われたる歴史に於て、単なる十年が何である乎！ 実にこれ歴史の幽玄を冒瀆するも甚しいではないか。

さて諸君、彼の惡徳を列挙するは余の甚だ本意とするところである。なんととなれば、その犯行は奇想天外にして識者の常識を肯んぜしめず、むしろ余に対して誣告の誹を発せしむる憾みあるからである。たとえば諸君、頃日余の戸口に Baana の皮を撒布し余の殺害を企てたのも彼の方寸に相違ない。愉快にも余は臀部及び肩胛骨に輕微なる打撲傷を受けしのみにて脳震盪の被害を蒙るにはいたらなかったのであるが、余の告訴に対し世人

は挙げて余を罵倒したのである。諸君はよく余の悲しみを計りうるであろう乎。

賢明にして正大なること太平洋の如き諸君よ、諸君はこの悲痛なる椿事をも黙殺するであろう乎。即ち彼は余の妻を寝取つたのである！ 而して諸君、再び明敏なること觸鬚の如き諸君よ。余の妻は麗わしきこと高山植物の如く、実に單なる植物ではなかつたのである！ ああ三度冷静なること扇風機の如き諸君よ、かの憎むべき蛸博士は何等の愛なくして余の妻を奪つたのである。何となれば諸君、ああ諸君永遠に蛸なる動物に戰慄せよ、即ち余の妻はバスク生れの女性であつた。彼の女は余の研究を助くること、疑いもなく地の塩であつたのである。蛸博士はこの点に深く目をつけたのである。ああ、千慮の一失である。然り、千慮の一失である。余は不覚にも、蛸博士の禿頭なる事実を余の妻に教えておかなかつたのである。そしてそのために不幸なる彼の女はついに蛸博士に籠絡せられたのである。

ここに於てか諸君、余は奮然蹶起したのである。打倒蛸！ 蛸博士を葬れ、然り、膺懲せよ憎むべき惡徳漢！ 然り然り。故に余は日夜その方策を練つたのである。諸君はすでに、正当なる攻撃は一つとして彼の詭計に敵し難い所以を了解せられたに違いない。而し

て今や、唯一策を地上に見出すのみである。然り、ただ一策である。故に余は深く決意をかため、鳥打帽に面体を隠してのち、夜陰に乗じて彼の邸宅に忍び入ったのである。長夜にわたつて余は、錠前に関する凡そあらゆる研究書を読破しておいたのである。そのため、余は空気の如く彼の寝室に侵入することができたのである。そして諸君、余は何のたわいもなくかの憎むべき髪を余の掌中に収めたのである。諸君、目前に露出する無毛赤色の怪物を認めた時に、余は実に万感胸にせまり、溢れ出る涙を禁じ難かつたのである。諸君よ、翌日の夜明けを期して、かの憎むべき蛇はついに蛇自体の正体を遺憾なく曝露するに至るであろう！余は躍る胸に髪をひそめて、再び影の如く忍び出たのである。

しかるに諸君、ああ諸君、おお諸君、余は敗北したのである。悪略神の如しとは之か、ああ蛇は曲者の中の曲者である。誰かよく彼の深謀遠慮を予測しうるであろう乎。翌日彼の禿頭は再び髪に隠されていたのである。実に諸君、彼は秘かに別の髪を貯蔵していたのである。余は負けたり矣。刀折れ矢尽きたり矣。余の力を以てして、彼の悪略に及ばざることすでに明白なり矣。諸君よ、誰人、かよ蛇を懲す勇士なきや。蛇博士を葬れ！彼を平和なる地上より抹殺せよ！諸君は正義

を愛さざる乎！ああ止むを得ん次第である。しからば余の方より消え去ることにきめた。ああ悲しいかな。

諸君は偉大なる風博士の遺書を読んで、どんなに深い感動を催されたであろうか？そしてどんなに劇しい怒りを覚えられたであろうか？僕にはよくお察しすることが出来るのである。偉大なる風博士はかくて自殺したのである。然り、偉大なる博士は果して死んだのである。極めて不可解な方法によって、そして屍体を残さない方法によって、それが行われたために、一部の人々はこれは怪しいと睨んだのである。ああ僕は大変残念である。それ故僕は、唯一の目撃者として、偉大なる風博士の臨終をつぶさに述べたいと思うのである。

偉大なる博士は甚だ周章者であつたのである。たとえば今、部屋の西南端に当る長椅子に腰懸けて一冊の書に読み耽つていると仮定するのである。次の瞬間に、偉大なる博士は東北端の肘掛椅子に埋もれて、実にあわただしく頁をくつていたのである。又偉大なる博士は水を呑む場合に、突如コップを呑み込んでいたのである。諸君はその時、実にあわただしい後悔と一緒に黄昏に似た沈黙がこの

書齋に閉じ籠もるのを認められるに相違ない。順つて、このあわただしい風潮は、この部屋にある全ての物質を感化せしめずにはおかなかったのである。たとえば、時計はいそがしく十三時を打ち、礼節正しい来客がもじもじして腰を下そうとしない時に椅子は劇しい痙攣を鳴らし、物体の描く陰影は突如太陽に向つて走り出すのである。全てこれらの狼狽は極めて直線的な突風を描いて交錯するために、部屋の中には何本もの飛ぶ矢に似た真空が閃光を散らして騒いでいる習慣であつた。時には部屋の中央に一陣の竜巻が彼自身も亦周章てふためいて湧き起ることもあつたのである。その刹那偉大なる博士は屢々この竜巻に巻きこまれて、拳を振りながら忙がしく宙返りを打つのであつた。

さて、事件の起つた日は、丁度偉大なる博士の結婚式に相当していた。花嫁は当年十七歳の大変美しい少女であつた。偉大なる博士が彼の女に目をつけたのは流石に偉大なる見識と言わねばならない。何となればこの少女は、街頭に立つて花を売りながら、三日というものの一本の花も売れなかつたにかかわらず、主として雲を眺め、時たまネオンサインを眺めたにすぎぬほど悲劇に対して無邪気であつた。偉大なる博士ならびに偉大なる博士等の描く旋風に对照して、これ程ふさわしい